

野鳥保護活動支援を目的にしたエコツアーの実現可能性

浅野敏久*・朝格吉楽図**・光武昌作**・西原元基**・竹本美紀***

* 広島大学大学院総合科学研究科社会文明研究講座

** 広島大学大学院総合科学研究科・院生

*** 広島大学総合科学部・学生

Feasibility study of an eco-tour designed to support the conservation work for wild birds

ASANO Toshihisa*, Chao-Ge-Ji-Le-Tu**, MITSUTAKE Shosaku**,
NISHIHARA Motoki**, TAKEMOTO Miki***

* Graduate school of integrated arts and sciences, Hiroshima University

** Graduate student, Graduate school of integrated arts and sciences, Hiroshima University

*** Student, Faculty of integrated arts and sciences, Hiroshima University

Abstract

Eco-tourism is defined as responsible travel to natural areas that conserves the environment and sustains the well-being of local people. Eco-tourism is expected to have some benefits to local people or local nature conservation group, and expected to make tourists and local people conscious of the importance of natural or cultural resources.

Are eco-tours good for the conservation of wild birds that are facing a critical loss of the habitat? Can eco-tours support civil movement for conservation of the birds? The aim of this paper is to clarify the problems of eco-tours for conservation of wild birds by a case study.

For this study we presented two events. One is a lecture meeting about the bird of the Hiroshima area and the other is a monitor tour to the field where the conservation activities had been doing for twenty years. In these events we did two kinds of questionnaire surveys to the audience and monitor tourists. In addition we did a group discussion by monitor tourists too.

The findings are as follows.

1) Evaluation of the eco-tour

This eco-tour is effective in the sense of environmental education. But it is not necessarily effective in the economic sense.

Eco-tourism is expected to produce some incomes to civil conservation groups. These incomes may be useful for some conservation activities, though these are not sufficient for personal expenses or office expenses of the conservation groups. In this survey we could estimate the amount of money which one eco-tourist is willing to pay at 1000 to 3000 yen per one tour. If the number of participants is twenty, 50000 yen is expected as total income.

But the eco-tour does not give local people efficient benefit economically though this can

encourage them mentally.

2) Problems of eco-tours in order to support nature conservation activity

- a) It is necessary to pay due attention to the objective nature. Eco-tours should not cause environmental degradation by overuse.
- b) High quality guides or interpreters are expected to take active roles. Especially it is necessary to bring up local guides.
- c) In order to reduce the risk of overuse, one should be careful to increase the number of tours and the number of tour group members.
- d) In order to increase economical effects, it is more desirable to add value of eco-tours and expand per-customer transaction than to increase the number of tours and tourists. Then eco-tours should be thought as learning tours, the value of eco-tours should be evaluated by the quality of their environment educational contents. And it is necessary to develop and supply the eco-tour programs depending on the level of tourist's environment-consciousness.

I はじめに

1) 研究の目的と背景

昨今、エコツアーという言葉が巷に流布している。持続可能な開発が現代社会の目指すべき基本的な考え方として定着する中で、観光研究や環境保全学など、さまざまな分野での研究課題にもなっている。しかし、エコツーリズムやエコツアーが広く知られるようになるにつれ、その意味内容は拡大解釈されるようになり、学問的な定義から離れた使われ方もなされるようになっていく。たとえば、インターネットでエコツアーを検索すると大手旅行代理店のエコツアー一覧¹⁾で「ズバリ! 知床2日間 タラバガニをお客様全員に1パイ付」とか「世界遺産をめぐる大自然紀行 屋久島フリーステイ 5日間/追加代金にて縄文杉登山や白谷雲水峡トレッキングなどのオプションが付けられます」といったものが宣伝されるように、自然地域を訪れる普通の観光ツアーを指す場合も多い。

ただし、学問的には、国際エコツーリズム協会が示した「自然地域を対象(目的地)とした、環境保全と地域住民の利益の維持とを両立させる責任を負う観光」²⁾などがエコツーリズムの定義として一般化している。ビートン(2002:18-21)は、定義をめぐる議論に自然保護関係、ツーリズム事業関係、学者・専門家関係の3つの視点からのア

プローチがあるとした上で、エコツーリズムの主な要素として、自然に基づいた活動、教育的かつ解説的な活動、持続可能な管理運営があるとしている。環境保全(自然保護や地域資源管理)や環境教育的な効果を志向するものとしては、世界観光機構と国連環境計画が「国立公園と保護地域における観光推進ガイドライン」³⁾を示しており、それに基づいて自然保護団体等が独自のエコツーリズム・ガイドラインを定めるなど(たとえば、日本自然保護協会1994:4-23)、広く支持されている。世界観光機構と国連環境計画がまとめたエコツーリズムの特徴としては、上記3項目に加え(あるいは3番目の持続可能な管理運営をもう少し詳しくして)、主に少人数のグループを相手に専門的な知識・技能を有する地元資本の中小業者により行われる観光、自然や社会・文化環境への影響を最低限に押さえる観光、地域コミュニティや自然保護に関わる団体などに経済的な利益をもたらすと同時に、当該地域に雇用を創出し、観光客や地域住民の自然・文化資源に対する意識を高めることにより自然地域の保護に資する観光が示されている(フンク・浅野2002:23)。このような定義に関わる議論は尽きないが、今や大筋での理解は定着しているといえ、定義やあるべき論について議論するより、現実的な諸問題にいかに対処するかを実践的に検討することにも力を入れるべきであるし、実際にそのような研究段階になって

いる。

エコツーリズムの現実的な問題へのアプローチとしてさまざまなことが考えられるが、本研究では、ひとつの切り口として、このガイドラインがもつ自然保護的なスタンスを尊重し、エコツアーの環境教育的な側面、自然保護活動に関わる団体や地域コミュニティの活動を支援する側面、結果として地域の自然保護に資する観光という側面を重視する。

そのような立場から、本稿では、事例を通じて、ローカルで小規模な自然保護活動を支援するエコツアーが日本国内で成立するための課題や留意点について検討する。事例として、広島県内を中心に、ある在野の生物学者（野鳥の保護活動家）が行っているブッポウソウという野鳥の保護活動を取り上げる。具体的には、現在、個人のボランティアな努力によって進められているブッポウソウの保護活動を、エコツアーという手段で多少でも支援できるのか、あるいはブッポウソウ保護につながるプラス効果を生み出すことができるのかについて検討したい。加えて、現在、小規模で地域的にも限定されたものが大部分といえる日本の自然保護活動や市民・住民レベルの環境教育活動において、エコツアーは有効な手段足りうるのかを展望することも視野に入れている。

2) 調査方法

まず、調査方法について整理しておく。そもそも本研究は、広島大学総合科学研究科の21世紀科学プロジェクト⁴⁾の一環として、平成19-21年度に採択された文理融合型リサーチマネージャー養成プログラム⁵⁾の資金の一部を充てて実施したものである。

調査は2つのイベントの企画・実施と、それぞれのイベント時に参加者からの情報を収集することよりなる。単なる意識調査ではなく、実際に具体的なイベントを企画・実施し、その過程での議論や直面する細かい問題への対応などを通じて得られた情報の意味や背景などを理解しようと試みた点、ならびに回答者の通り一遍のアンケートへの回答ではない意見聴取を試みた点に方法論上の特徴がある。事例としては特殊な事例かもしれな

いが、現象を掘り下げて検討するために一定の有効性があると考えている。

実施したイベントと調査内容は以下の通りである。調査に用いた調査票を末尾に参考として載せておく。

イベント1：ブッポウソウと広島の野鳥に関する講演会の開催

調査① 講演会来場者を対象とするアンケート調査（調査票1）

イベント2：ブッポウソウ保護活動の現場を巡るモニターツアーの実施

調査② モニターツアー参加者を対象とするアンケート調査（調査票2）

調査③ 参加者によるグループ討議

調査④ 2日間のモニターツアー中の参加者の発言や行動の観察

講演会は、2008年5月16日（金）18：00～19：30に広島大学総合博物館の公開講演会との共催として実施した。来場者は90名ほどで、アンケートの回答者は80名であった。参加者の募集は、博物館の通常の公開講演会の募集方法（ホームページでの告知、メーリングリスト会員への周知、新聞やタウン誌などでの報道、学内ポスターなど）のほか、総合科学研究科内での構成員（教職員・院生）への案内や、筆者の講義時における受講生への紹介などによった。

講演者は、九州大学の非常勤の研究員で広島クマタカ生態研究会代表である飯田知彦氏で、広島県内他でブッポウソウ保護活動を実践している本人である。講演内容は、絶滅危惧の指定を受けているブッポウソウの生態と保護活動の紹介を中心に、広島県内の野鳥のおかれている現状、生態系の現状について、クマタカなどの他の特徴的な野鳥と対比しつつ解説するというものであった。

モニターツアーは、2008年6月28日（土）～29日（日）にかけての1泊2日で、広島県北部のブッポウソウの巣箱掛け（後述）をしている現場を広く見て回った。モニターツアーの行程は表1に記載したとおりである。参加者は20人で、内訳は一般参加者4名⁶⁾、学生・院生13名、教員2名、外部講師1名であった。外部講師として現地の案内・解説を講演会と同じく飯田氏に依頼した。モニ

ツアーであり、大学院生向けの国内巡検との位置づけでもあったので、バス代と宿泊費は調査者側が負担した（参加者は飲食費等の負担）。なお、費用負担意識については調査の重要な項目の1つとした。

参加者アンケート調査は、全行程を終えた大学帰着直後に行った（回答数20通）⁷⁾。全体でのグループ討論は2日目の午後に90分ほど行い、その際にはツアーの最初から配っておいた自由回答式（質問内容は後述）の調査用紙に意見を記入した上で参加してもらい、討議後に用紙を回収した（回収数19通）⁸⁾。なお、初日の夜にも宿舎ごとに分かれて意見交換会を開き、可能な範囲で意見を聴取した。

II ブッポウソウの生態と広島県内での保護活動

ブッポウソウ（学名*Eurystomus orientalis*）はブッポウソウ目ブッポウソウ科の鳥類で、カワセミに比較的近い種である。くちばしと足が赤いほかは全身青緑がかった色で、大きさはハトよりやや小型程度である。翼を広げると白斑が見られ、その姿の美しさゆえに「森の宝石」とも称される⁹⁾。長年の間「ブッポウソウ」と鳴くと考えられ、コ

ノハズクと混同されていたが、実際にはゲツ、ゲツと濁った声で鳴くことが確認された¹⁰⁾。主にトンボ類、セミ類、カゲロウ類などの大型飛行性昆虫を空中で捕獲して食べる。ユーラシア大陸東部に分布し、通常日本には四月下旬頃、本州、四国、九州にかけて夏鳥として飛来・繁殖し、冬は南方に渡る。

日本は生息地の北端に位置するため本来の生息数が少なかったことに加え、近年全国的にその数を減らしていることから、環境省レッドデータブックにおいて絶滅危惧 I B類（EN）に指定されている。ブッポウソウはアホウドリやタンチョウよりも認識度は低いものの、それら以上に絶滅の危険度が高く、迅速なブッポウソウ保護対策が求められている¹¹⁾。

ブッポウソウが急速に減少している原因としては、近年の森林の荒廃、餌となる大型昆虫が生息する広葉樹林の減少などもあげられるが、圧倒的に繁殖場所である樹洞や電柱の穴の減少が直接的に作用している¹²⁾。ブッポウソウはオオアカゲラが電柱にあけた巣穴などを利用してはじめて繁殖を可能とするが、時代とともに木製電柱がコンクリート電柱へたてかえられるにつれ繁殖穴が激減した（飯田、1992、2001）。

こうした営巣木（樹洞や木製電柱）の消失が個

表1 モニターツアーの行程

時 間	場 所	内 容
6月28日（土）		
8:30～11:30	広島大学発	車中でガイダンスと参加者自己紹介
11:30～14:00	庄原市西城町（県民の森）	昼食+県民の森を散策・自然観察等
14:00～17:00	庄原市西城町・比和町・口和町	バスで移動しながら保護活動現場見学
17:00～17:30	三次市君田町	生息密度が高い地区でブッポウソウ観察
17:30～19:30	三次市君田町（君田温泉）	夕食・入浴・休憩
19:30～22:00	三次市高野町（神之瀬湖）	ダム周辺で夜の観察会（コノハズクの声）
22:00～24:00	三次市君田町（君田温泉）	宿舎で意見交換や懇談
6月29日（日）		
9:00～10:00	三次市君田町～作木町	バスで移動しながら保護活動現場見学
10:00～12:00	三次市作木町（下地区）	めんがめ倶楽部メンバー等との話し合い
12:00～13:00	三次市作木町（下地区）	ブッポウソウの観察
13:00～13:30	三次市作木町（川の駅常清）	昼食
13:30～14:30	三次市作木町（川の駅常清）	エコツアーに関するディスカッション
14:30～15:00	三次市作木町（常清滝）	常清滝周辺の散策と観察
15:00～17:00	広島大学帰着	大学にて参加者アンケートを実施

体数の急減の要因とされ、山口県や鹿児島県などの数県では絶滅したと考えられている。もともと比較的個体数の多かった広島県においても、保護が開始される1980年代までその数は落ち込みを見せた。

ブッポウソウ減少の主因が営巣木の消失という単一の理由であるために、減少原因が複合的なクマタカなどと比較すると保護は容易である。つまりもっとも有効な保護対策は巣箱の架設であり、飯田氏は、木製電柱からコンクリート製電柱へのたてかえが行われた地点に巣箱を架設する保護活動を行ってきた(飯田, 1992, 2001)。また、電力会社の協力を得、たてかえの代替措置として付近に繁殖用木製電柱を設置する活動も行い、徐々につがい数を回復させることに成功した(飯田, 1992)。その結果、広島県内の繁殖つがい数を、最も減少した1980年代半ばの5～10つがいから、2007年には約270つがいにまで増殖させることができた(飯田, 2008)。

また繁殖つがい数を回復させることにとどまらず、保護の過程では地域ごとの個体群維持や、増加してきた場合には広く分散させる個体群管理も実施し、現在ではブッポウソウは広島県のほぼ全域に生息することが可能となりつつある(飯田, 2008)。

そのような中で、三次市作木町では、飯田氏の指導のもと、「めんがめ倶楽部」¹³⁾が中心となって巣箱掛け等ブッポウソウの保護活動に取り組んでいる。保護に際しては、ブッポウソウを生活から切り離すのではなく、地域住民が積極的に理解、認識してゆく姿勢をとっており、ブッポウソウを地域の話題にすることで地域活性化に結びつけている¹⁴⁾。

巣箱掛け、巣箱作りのほかにも、研修会、情報交換など幅広い活動を行っている。また田園で農薬を使用しない環境づくりを行ったところ、餌となる昆虫類はもちろん、ホタルの生息数も増加させるなど生活環境を向上させることができた。ブッポウソウの個体数も平成18年17つがい、平成19年28つがい、平成20年35～36つがいと順調に増加しており、希少動物保護の数少ない成功例となっている¹⁵⁾。

Ⅲ 講演会参加者アンケートの結果

前述のとおり、2008年5月の講演会参加者を対象に「自然保護活動支援につながるエコツアーに関するアンケート」(調査票1:本稿の末尾に添付)を行った。回答者は80名で、参加した大部分の人から回答を得ることができた(回収率89.9%)。ただし、この講演会は、広島県の野鳥についての講演なので、そもそも野鳥に関心のある人が集まっており、一般的な市民を代表するというものではない。しかし、今回検討しようとしているのは、野鳥保護活動を支援するようなエコツアーの可能性や課題なので、(将来的な展開や発展形を検討するならともかく、)実際問題として参加者のターゲットとなるのは、不特定多数の市民一般ではなく、生き物や自然に関心のある人や自然保護(活動)に関心のある人達であると、まずは想定してよい。そのため、アンケートの対象が基本的に野鳥や自然に関心のある人になっていることは想定内であり、平日の夕方という時間帯に開催したイベントに、近隣からこれだけの参加者を集めることができたことはプラス評価できる。なお、当然ながら、考察に当たって、回答者の志向性に偏りがあることを留意しなければならない。

質問内容は、回答者の属性や趣味・関心に関するもののほか、ブッポウソウや野鳥への関心の程度、ブッポウソウの保護活動の一環としてのエコツアーについての評価、一般的なエコツアーのイメージ、エコツアーの参加費に上乘せすることを許容できる自然保護活動支援のための費用負担額などである。その主な結果については、以下のとおりである。

①回答者の属性および趣味・関心など

性別は、男性45.0%、女性51.3%¹⁶⁾と、ほぼ半々になっている。年齢階層は、20代が30.0%ともっとも多く、40代、50代、60代がそれぞれほぼ16%となった。これは学生・院生と、博物館の広報や新聞報道などをみて興味を持った一般の中高年市民が主な聴衆(回答者)になったことを表している。職業等については、学生が39.0%¹⁷⁾、勤め人26.0%が多く、次いで主婦・夫(9.1%)や自営業者などがいた。

基本的な属性について、学生・院生の割合が高い。考察に際し、このことへの配慮が必要になる。特に本調査の場合、保護対策の評価や費用負担について尋ねており、学生割合が高いことが結果に影響する懸念があった。しかし、実際には、結果を前倒して示すと、回答の傾向に学生であるか否かはあまり関係ないことがわかった。結果の集計に際して、学生と非学生のグループに分けて回答傾向に有意な差が生じるかどうかを確認したところ、独立性の検定ではほとんどの項目に有意な差はみられなかった。一部、差があるように見えるものもあるので、それらについては以下の考察において、適宜触れていくことにする。

また、学生の割合が高いこと以外では、趣味や意識面に顕著な特性がみられた。趣味に関して、27種の項目(調査票1のQ13)から複数選択してもらったところ、3分の1(33%)以上の人が、山歩き・ハイキング、読書、バードウォッチング、その他の自然観察、博物館・美術館めぐり、写真撮影、家庭菜園・園芸を選択した。明らかにアウトドアや自然志向の趣味が選ばれる傾向が高い。また、関心のある環境問題(調査票1のQ14)としては、温暖化68.8%は一般的としても、これに次いで、野生動物の減少63.8%、外来種の侵入57.5%、里山などの環境悪化50.0%となり、生物関連の問題への関心の高さがうかがえる。講演会のテーマに沿った聴衆が集まっていることが確認できる。繰り返しになるが、今回の調査はそのような層が、エコツアーをどのように評価するのかを調べようとするものである。

②ブッポウソウの保護活動について

表2は、ブッポウソウの保護活動を資金的に支援するとしたら、どのような方法が望ましいかについて(調査票1のQ4)、回答者がつけた順位を得点化¹⁸⁾したものである。第1位は、行政の助成金・補助金(行政が積極的に保護事業を行う)となり、他の項目より高く位置づけられた。エコツアーなどの事業を行い、収益を保護活動に充てることは、第2位になっており、手法として環境事業を通じた保護活動資金の確保は支持されている。

属性別にみるとエコツアーの評価に男女差はなく、年齢では、20歳未満、20代、30代、50代で高

い得点(4点以上)になった。逆に得点の低かった40代、60代では、行政の助成金・補助金の得点が高くなっている。ただし、20歳未満、20代でも補助金・助成金の得点は高いので、必ずしも若い層でエコツアーの評価が特に高いわけではない。

また、後述の一般的なエコツアーに関する設問で、ツアー料金に上乘せられてもよい自然保護活動支援のための費用を尋ねているが(調査票1のQ9-1)、それとこの評価の関係をみる(表3)と、エコツアーに高い得点を与えている層は、500~1000円をピークとする支出許容額の低い層になっていて、逆に行政の補助金・助成金は、エコツアーにおける負担額を5000~10000円と答えた層において、もっとも高い得点を与えられている。個人あたりの負担額を低く見積もる場合は、エコツアーの評価が高くなり、負担額を高く想定する場合には行政の責任を強く意識する傾向がみられる。

このことは重要な問題が示唆している。それは、個人あたりの負担額を少なくし、その分、多くの人が参加する¹⁹⁾のであれば、エコツアーは支持されるが、負担額を高くし、少人数の参加で必要額を確保するエコツアーだと、手法としての評価が低くなると考えることができる。環境への負荷を軽減するためにツアー参加者の人数を少なくすべきと考えるエコツアーの理念と矛盾が生じることが懸念される。

なお、回答者に学生が多かったこととの関連に

表2 保護活動を資金的に支援する望ましい方法

方 法	得 点
1 行政の助成金・補助金(行政が積極的に保護事業を行う)	4.46
2 財団などの助成金を得る	3.69
3 保護団体などをつくって会員から会費を集める	3.50
4 保護基金をつくって寄付を募る	3.98
5 エコツアーなどの事業を行い、収益を保護活動に充てる	4.13
6 実際の活動に関わる人の手弁当で行う	1.96

* 1位に6点、2位5点、3位4点と点数を与え、各項目について得点の平均を求めた。
資料：講演会来場者アンケートによる

触れておく。支出許容額は学生と非学生とであまり差がみられなかった。学生以外の場合に高額な選択肢を選んだ人が複数名いたのに対して、学生にはいなかった点が両者の違いといえる。若い世代はエコツアーを高く評価するが、高額な負担は想定していない。

ところで、他の手法との比較ではなく、単純にブッポウソウ保護のためのエコツアーをどう評価するかを尋ねたところ（調査票1のQ5）、回答者の80.1%が、「とてもよい」か「まあまあよい」と答えている。ただし、これは、回答者の属性（野鳥への関心が高いという志向性）を反映して、過大評価になっている可能性が高い。また、そのようなツアーが行われたとして、自分自身が参加するか否かを尋ねた設問（調査票1のQ6）²⁰⁾でも、85.1%が参加したい（ぜひ参加したい+内容によっては参加したい）と回答している。内容によっては参加したいと答えた人の中で、自然観察・自然体験的なものであれば参加したいという人（38.8%）と、保護につながるものであれば参加したいという人（46.9%）が、ほぼ同程度であった。ブッポウソウ保護のエコツアーを「とてもよい方法」と答えた人は、保護につながるものなら自分も参加したいと答え、「まあまあよい方法」と答えた人は、自然観察・自然体験的なものであれば参加したいと答える傾向がある。

前述の費用負担についての傾向、すなわち高負担を想定する人の評価が低く、少ない負担を想定する人の評価が高い傾向は、この場合にも現れており、ブッポウソウ保護のためのエコツアーを「と

てもよい」と評価する人や、自分も「ぜひ参加したい」と答えた人は、費用負担額を低く想定しており、逆に「まあまあよい」と評価する人や、「内容によっては参加したい」と答えた人は、費用負担額を高く想定していた（表4・5）。

③一般的なエコツアーのイメージと評価

本稿の冒頭に記したように、エコツアーという言葉はいろいろな使われ方をしている。環境問題や自然保護への関心が高いと考えられる今回の回答者が、エコツアーについてどのようなイメージを抱いているのかを尋ねた（調査票1のQ7-1・2）。

まず、ツアーの行き先としては、海外（どちらかといえば海外を含む）が11.3%、国内（どちらかといえば国内を含む）が41.3%、どちらともいえないが33.8%であった。予想外に国内旅行のイメージが強かったが、講演内容とこのアンケートの前半でブッポウソウ保護の質問をしたことの影響があったかもしれない。

次にツアーの内容としては（表6）、「生物の不思議や自然保護について学ぶ」が58.1%と過半を占め、第2位の「豊かな自然の中で山歩きや急流下りなどを楽しむ」16.2%を大きく引き離れた。これも今回の回答者の属性上の偏り²¹⁾を反映しているかもしれないが、今回のような対象者においては、エコツアーは「学び」の観光と位置づけられており、学問的なエコツアーのイメージ²²⁾がある程度は理解されているといえよう。

④自然保護活動に資するエコツアーの評価

自然保護活動に参加したり、保護地区の住民やNPOへの経済的メリットを生み出したりすること

表3 望ましい資金的支援の方法とエコツアーでの活動支援費用負担許容額の関係

国内ツアーでの 負担許容額	方法1 行政支援	方法2 財団助成	方法3 会費	方法4 寄付	方法5 エコツアー等	方法6 手弁当
0円	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
0～500円	4.3	4.0	3.7	3.7	2.7	2.7
500～1000円	3.9	3.5	3.5	3.8	4.5	2.4
1000～3000円	4.8	3.7	3.2	4.0	4.1	1.8
3000～5000円	4.1	3.8	4.0	4.0	4.1	1.3
5000～10000円	5.7	4.3	4.7	4.3	2.0	1.0
10000円以上	5.0	4.0	3.0	6.0	0.0	0.0

* 負担許容額：あなたが参加するツアーで参加費に上乗せされてよい保護活動支援金

* 表中の数字は表2と同様に算出した得点（負担許容額別に集計）

* 方法1～6は表2の番号と同じ

資料：講演会来場者アンケートによる

を目的とするエコツアーについての評価（調査票1のQ8）や、自分自身がそのようなツアーに参加するとして、その参加費用の中に含まれる自然保護活動に使われる費用負担の許容額はどの程度か

（調査票1のQ9-1・2）について尋ねたところ、次のことがわかった。

まず、自然保護につなげることを目的としたエコツアーは、前項のブッポウソウのエコツアーよ

表4 ブッポウソウ保護のためのエコツアー評価と一般的エコツアーでの保護資金負担許容額

国内ツアーでの負担許容額	ブッポウソウ保護のために行うエコツアーの評価									
	とてもよい		まあまあよい		どちらとも		あまりよくない		よくない	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
0円	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
0～500円	3	9.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
500～1000円	12	37.5	9	29.0	1	25.0	0	0.0	0	0.0
1000～3000円	11	34.4	14	45.2	1	25.0	0	0.0	0	0.0
3000～5000円	5	15.6	5	16.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
5000～10000円	1	3.1	2	6.5	1	25.0	0	0.0	0	0.0
10000円以上	0	0.0	1	3.2	1	25.0	1	100.0	0	0.0
計	32	100.0	31	100.0	4	100.0	1	100.0	0	-

* 無回答分は除いた。

* 「0円」の行と「よくない」の列を除いた行列で独立性の検定を行うと1%有意で両変数に関係があると判定される。

資料：講演会来場者アンケートによる

表5 ブッポウソウ見学ツアーへの参加意向と一般的エコツアーでの保護資金負担許容額

国内ツアーでの負担許容額	ブッポウソウ見学ツアーへの参加意向									
	ぜひ参加したい		自然体験的なら参加したい		保護活動的なら参加したい		その他内容次第で参加したい		参加したいと思わない	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
0円	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
0～500円	3	16.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
500～1000円	7	38.9	6	33.3	6	26.1	1	33.3	0	0.0
1000～3000円	5	27.8	5	27.8	12	52.2	2	66.7	1	50.0
3000～5000円	2	11.1	5	27.8	2	8.7	0	0.0	0	0.0
5000～10000円	1	5.6	1	5.6	2	8.7	0	0.0	0	0.0
10000円以上	0	0.0	1	5.6	1	4.3	0	0.0	1	50.0
計	18	100.0	18	100.0	23	100.0	3	100.0	2	100.0

* 無回答分は除いた。

* 3～5列を「内容次第で参加したい」とまとめた行列で独立性の検定を行うと5%有意で両変数間に関係があると判定される。

資料：講演会来場者アンケートによる

表6 エコツアーのイメージ（内容）

ツアーの内容	割合%
壮大な自然の景観を見物する	3.8
豊かな自然の中で山歩きや急流下りなどを楽しむ	15.0
身近な自然の中で採集や工作等の活動ができる	6.3
生物の不思議や自然保護などについて学ぶ	53.8
訪問先の住民やNPOなどと交流する	0.0
その他	1.3
無回答	20.0

資料：講演会来場者アンケートによる

り高く評価された（「とてもよい」が47.5%、「まあまあよい」が30.0%）。「とてもよい」と「まあまあよい」の属性による差は、男女間ではあまりなく、年齢別では、比較的若い年齢層で「とてもよい」の割合が高く、中高年層で「まあまあよい」の割合が高い傾向が多少認められる。職業等では、学生で「とてもよい」の割合が高く、勤め人に「まあまあよい」の割合が高くなった。

次に、エコツアーの参加費に上乗せされる自然保護活動費の許容額について、国内ツアーの場合と海外ツアーの場合に分けて尋ねた設問では（表7：調査票1のQ9-1・2）、国内ツアーの場合、「1000～3000円」が32.5%で最も高く、次いで「500～1000円」が27.5%となった。海外ツアーでは高めになり、「1000～3000円」の24.1%が最も高くなるが、次いで「3000～5000円」と「5000～10000円」が16.5%、「10000～30000円」が11.4%となった。

ブッポウソウのエコツアーの場合、この手法を評価する程度が高い人は許容額が低く、やや評価が劣る人の許容額が高い傾向が認められたが、一般論としてのエコツアーに関しては、そのような傾向は認められず、むしろ逆に、評価の高い人の許容額が、それよりやや劣る評価の人の許容額より高くなる傾向が、多少ながら認められた（表8・9）。これは年齢の高い人、学生ではない人が、ブッポウソウのエコツアーより一般的なエコツアーを高く評価したことによっている。ブッポウソウのエコツアーが、年齢の高い層（学生ではない層）には、身近で見慣れた農村的環境の中での学習見

学会のようなものにみえ、ツアーの魅力を感じられず、手法としての評価も下がってしまったのかもしれない。

その他の属性との関係を見ると、国内ツアー、海外ツアーの場合とも、男女差はあまりないが、高額負担の回答者が男性に、低額負担の回答者が女性に多いこと、また、年齢では、若い層で許容額が低く²³⁾、中年層で高くなる傾向がある。

IV モニターツアーの結果

1) 参加者アンケート

モニターツアーは、2008年6月28日～29日の1泊2日で、広島県の北部地域一帯をバスで見学して回るというものであった（前掲表1）。参加者はスタッフ・講師もあわせて20名で、アンケート（調査票2：本稿の末尾に添付）は全行程が終了した段階で、解散前に十分な時間をとって行った。

質問の内容は、今回のツアー内容や進行に関する評価と、自然保護などに関する意見、それと、実際に掛かった費用を示したうえでの望ましい参加費・参加人数の設定、エコツアーへの参加希望と希望する参加費などであった。それらについて順にみていく。

ところで、このアンケートはサンプル数が少なく、大半が学生（大学院生）である。そのため、統計的な分析を行うのではなく、回答の多少を傾向として把握するにとどめたり、自由記述を検討対象にしたり、費用負担にしても、望ましい費用負担額を直接尋ねるのではなく、実際にかかった

表7 ツアー参加費に上乗せされてよい保護活動支援費の許容額

国内ツアーの場合			海外ツアーの場合		
負担許容額	人	割合%	負担許容額	人	割合%
0円	0	0.0	0円	0	0.0
0～500円	3	3.8	0～1000円	6	7.5
500～1000円	22	27.5	-	-	-
1000～3000円	26	32.5	1000～3000円	19	23.8
3000～5000円	10	12.5	3000～5000円	13	16.3
5000～10000円	4	5.0	5000～10000円	13	16.3
10000円以上	3	3.8	10000～30000円	9	11.3
-	-	-	30000円以上	3	3.8
無回答	12	15.0	無回答	17	21.3

資料：講演会来場者アンケートによる

経費を示して、それをふまえた料金設定を考えてもらうといった回答者の経済状況と関係しない質問の仕方をするなど、サンプルの制約に配慮した。

① ツアー内容や進行に関する評価

全体的に評価は概ね良好であったが、特に実際にブッポウソウを見られたことと、ブッポウソウとその保護活動に関する解説は、雨天の中でバスの車窓からの観察であったにもかかわらず、高評価であった。保護活動と関係ない滝見学（雨上がりで水量が多く迫力があつた）や、作木町下地区での「めんがめ倶楽部」の地域活動（ブッポウソウ保護活動を含む）について活動の担い手となっている地区の方からの聞き取りや懇談、後述する参加者同士のディスカッションの評価も高かつた。一方、「声のブッポウソウ」（コノハズクの鳴き声を聞きに行く夜の観察会）は、雨が強く、声を聞くことができなかつたこと、現地までの移動が大変だつたことなどから評価が低くなつた。

進行に関しては、歩く量が少なかつた、バスの移動が疲れた、宿泊場所（コテージ）には満足で

きた、参加人数はちょうどよかつた、期間は1泊2日でちょうどよかつたという回答が多かつた。中でも、人数と期間は、ほとんどの人が適度であると答えていた。ただし、今回のツアーが、参加前に想像していたものと合つていたかどうかという質問に関して、「違つた」と答えた人がほぼ半数いた。何が違つたかについては、バスに乗っている時間が長かつた、散策時間が少なかつたという否定的なものから、ディスカッションの時間が組み込まれていて、当初の想像よりも積極的な主体性が求められ、意識を自然保護やテーマの課題に向けている必要があつた、参加者と交流する内容が多く楽しかつた、自然の中での体験ではなく自然について学ぶものであつた等、問題意識を持つことを求める内容が当初の想像と異なるということであつた。その他に、参加者が予想以上に鳥を見て喜んでいてというものもあつた。

② 今回のエコツアーに参加して抱いた思い

アンケートでは、野鳥について、自然保護活動について、エコツアーで訪れる地域について、「今

表8 自然の保護のためのエコツアーの評価と保護活動資金負担許容額（国内ツアー）

国内ツアーでの 負担許容額	とてもよい		まあまあよい		どちらとも		あまりよくない		よくない	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
0円	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	-	0	-
0～500円	3	8.1	0	0.0	0	0.0	0	-	0	-
500～1000円	10	27.0	10	41.7	2	33.3	0	-	0	-
1000～3000円	16	43.2	8	33.3	2	33.3	0	-	0	-
3000～5000円	4	10.8	6	25.0	0	0.0	0	-	0	-
5000～10000円	3	8.1	0	0.0	0	0.0	0	-	0	-
10000円以上	1	2.7	0	0.0	2	33.3	0	-	0	-

*無回答分は除いた。

資料：講演会来場者アンケートによる

表9 自然の保護のためのエコツアーの評価と保護活動資金負担許容額（海外ツアー）

海外ツアーでの 負担許容額	とてもよい		まあまあよい		どちらとも		あまりよくない		よくない	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
0円	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	-	0	-
0～1000円	2	6.1	4	16.7	0	0.0	0	-	0	-
1000～3000円	9	27.3	8	33.3	2	40.0	0	-	0	-
3000～5000円	9	27.3	3	12.5	1	20.0	0	-	0	-
5000～10000円	7	21.2	6	25.0	0	0.0	0	-	0	-
10000～30000円	5	15.2	3	12.5	0	0.0	0	-	0	-
30000円以上	1	3.0	0	0.0	2	40.0	0	-	0	-

*無回答分は除いた。

資料：講演会来場者アンケートによる

回参加して考えが変わりましたか」と尋ねてみた(調査票2のQ7)。

まず、「野鳥について」では、単純にかわいい、身近な存在になった、今後気にすると思う、バードウォッチングが楽しいことを知った等、鳥への親しみを感じたというもののほか、ツアーの参加者や営巣地の住民など「普通の人」が野鳥とのふれあいに喜びを見いだせることに感銘を受けたというもの、人間の生活と野鳥とが思った以上に関係が深いことを知った、保護しなければならない野鳥もいることを知った等、野鳥の生態や保護の必要性を学んだというもの、保護上の課題や保護活動の大切さを学んだ、自分も今後このような活動に参加したいというもの等があった。短時間のツアーではあったが、環境教育の目標(トビリシ宣言, 1977年)とされる、気づき、知識、態度、技能、参加の5段階²⁴⁾の内、前半3段階に係するコメントが寄せられたことは、効果の持続性に疑問は残るが、観察会としてのツアーには一定の環境教育的な効果があったといえよう。

次に、「自然保護活動について」では、身近な自然を学ぶ必要性を感じたと書いたものや、学生の立場を活かして勉強し行動していきたいと積極的なコメントを書いたものもあったが、もっとも多かったのが、人によって多様な考え方があり、その中での合意形成を図ることの大切さ、住民と研究者、ツアー参加者、ガイドの間の情報共有の大切さ、特に現地住民との連携の重要性を認識したという回答であった。今回の参加者の中には、生態学を専攻している理系学生・教員と、観光学を専攻している文系学生・教員とがいて、さらに一般参加者には自然保護活動を行っている方もおり、エコツアーをめぐる複数の立場からの意見

交換ができたことが、参加者にとって刺激になったと考えられる。また、時間は限られたが、作木町下地区の「めんがめ倶楽部」メンバーとの話し合いは、参加者にエコツアーにおける地元住民の存在感を強く印象づけ、住民不在の自然保護ではいけないという考えを改めて実感することにつながった。

第3の「エコツアーで訪れる地域について」では、この点がさらに強調され、地域との交流が大切だという意見を中心にいろいろな意見が寄せられた。エコツアーの対象地として、風光明媚な土地を訪れる印象があったが、道路脇からの観察でも成り立つことに気づいたとか、訪問先として地元の住民等が熱心に活動している現場を訪れるのがよいとの意見もあった。エコツアーは人里離れた場所で行われるのではなく、人間の生活する地域での活動として考えなければならないとし、対象地に訪れる観光客は1回限りであっても地元にとっては訪れる全観光客の影響を受けることや、域外の旅行会社の観光ツアーでは経済的な効果が地元に残らないことに気づいたという意見もあった。住民の生の声を聞くことによって、人と野鳥の関わりについて理解が深まり、そこで何が求められるのかを考えることにつながる。そのような機会を提供するものとしてエコツアーを位置づけることは重要であろう。

③エコツアーの参加費と参加人数について

参加者に今回のツアーで実際に掛かった費用(外部講師謝金分を除く)を示した上で、同内容のエコツアーを独立採算の事業として行うとしたら、参加費をいくりに設定したらよいか、また、その際の参加人数(内容、サービスの質、費用、自然への圧力などを勘案するように注記)はどの

表 10 ブッポウソウ見学ツアーにかかった経費

費 目	合計 (21 人分)	1 人あたり
バス代	137,000 円	約 6,500 円
宿泊費	54,500 円	約 2,600 円
食事代	3,854 × 21 円	3,850 円
入浴料	300 × 21 円	300 円
外部講師謝金	? 円	? 円
計	278,650 円 + ? 円	約 13,250 円 + ? 円

資料：講演会来場者アンケートによる

程度がよいかを尋ねた（調査票2のQ8）。同時に、その場合に自分自身が参加するかどうかを質問している。

費用については、表10に示した通り²⁵⁾で、謝金分を除くと1人あたり13,250円掛かっている。今回のツアーでは、この内のバス代と宿泊費、外部講師謝金を調査費で支出し、その他は参加者の自己負担とした。

本調査では、ブッポウソウ保護活動支援のための費用負担を参加者に、寄付として求める（問う）のではなく、活動をしている当事者にガイドを依頼し、講師謝金を支払うことで、それを活動支援の費用負担としてももらうことを想定した。かつ、参加者に講師謝金分としていくらが妥当かを直接問わずに、今回のツアーに参加した実感として回答者がいくら相当の内容であったのかを、実際にかかった費用（およびそれに上乗せして講師謝金が必要なこと）を知ってもらった上で、それぞれ考えてもらった。そして、回答者が望ましいと判断した参加費と実際にかかった費用との差額を、ツアーを独立採算で企画した場合に支払い可能な講師謝金（すなわち活動支援のための負担金）に回せる金額とみなした。

つまり、単純に考えれば、回答者の設定する参加費と講師謝金以外の実費13,250円との差額に参加人数を掛けたものが、講師謝金に充てられる分²⁶⁾とみなすことができ、これは本稿の狙いからいうと対象となる自然保護活動支援に回せる金額になる。

回答金額は、10,000円から25,000円の幅に分布し、その平均額は16,125円であった²⁷⁾。実際の経費として明示した13,250円より低い回答があったのは、バス代や食事代等をもっと削れるという考えによるものであるが、その場合でも謝金分の差額はわずかしか想定されていないと考えられる。実際に、バス代は数社の見積をとってもっとも安いものであったし、宿泊費1人2,600円は相当安い設定になっており、単発の旅行企画では、これより大幅に経費を下げるのは容易ではない。

結果として、外部講師謝金分（自然保護活動支援分とみなす）は、1人あたり2,875円であった。この金額は、前章のエコツアー（国内）で負担し

てもよい自然保護活動分と比べてみると、もっとも回答の多かった「1000～3000円」のランクに該当する。ただし、この設問では「500～1000円」の割合が多少の差でこれに次いでおり、「1000～3000円」でも1,000円に近い方に回答者の意識があると思われる。今回の2,875円という金額は、それと比べれば高めの評価になっているといえる。

参加人数について同じように平均を求めると16.7人となった。今回のツアーよりやや少人数が望ましいとの判断である。別の質問（前述）で、今回の参加者数を「ちょうどよい」と答えたものが80%、「多い」が20%だったので、その結果とも合致する。いずれにしても今回の参加人数程度が上限と考えられている。今回のブッポウソウの巣箱と給餌活動の見学は、バスの車窓から見学できるもの（外に出る場合は数百メートル離れた位置からの観察）だったので、この人数でも鳥の行動に影響を与えなかったが、場合によってはこの人数だと悪影響を与えてしまう恐れもあり、多くの参加人数は想定できない。

以上2つの数字を掛けると、外部講師謝金分（自然保護活動支援分）は、約48,000円となった。1回の企画であげられる収益としては、これはかなり高めの設定になっていると考えられるが、飯田氏がボランティアで行っている保護活動のために自ら負担している金額²⁸⁾には遠く及ばないし、保護活動と直接関係のない今回のツアーの企画や解説等の労働対価をまかないきれぬかについても疑問がある。それでも多少の活動費の足しになるのは確かであり、ブッポウソウ保護に関する環境教育的な効果も、前項に記したようにそれなりに期待できる。ツアーの企画・実施や現地での解説等を含めて、その部分を無償の活動と割り切ることができれば（言い換えるとボランティアの自然保護活動の一環として行うのであれば）、活動資金の調達と教育・啓発活動の実践という意味で効果があるといえよう。

なお、回答者に自分が設定した参加費と参加人数のエコツアーがあった場合に参加するかどうかを尋ねたところ、75%の回答者が参加すると答えている。残る25%について、今回は自己負担が少ないので勉強として参加したということである

う。

また、関連して「一般に自然（保護）学習的なエコツアーがあった場合、参加費がいくらなら参加しますか」（現地のツアー出発地・到着地までの旅費は別²⁹⁾）と尋ねたところ、平均値で約15,000円であった。今回のツアーでは経費を参加者に示したのと、大学発着のため現地発着地までの旅費がほとんど掛からないケースだったので、先の参加費設定が約16,000円とやや高めになったが、一般論になると、参加費イメージはより低く、厳しくなってしまう。これは回答者の大部分が学生・院生であることの影響が大きいと考えられるので、一般にはもっと高い金額が許容されよう。それにしても、1人あたりの活動支援負担額をあまり高く設定できないことは明らかで、先のアンケートに示された「1000～3000円」というあたりが現実的な金額といえよう。しかも、それを実現するために経費を削減するなどして、総額を低く抑える努力が必要である。

2) 参加者によるディスカッションの結果

参加者には、ツアー開始時より、2日目の午後16時～19時ほどの時間をとって、エコツアーに関する意見交換をすることを予告し、その時までの準備として、質問用紙を配布し、意見を書いておいてもらうように依頼した。以下は、ディスカッション時の発言と、この用紙（ディスカッションシート）に書き込まれた意見をもとにまとめた結果である。ただし、以下は、議論の流れを再現したものではなく、発言や記述の表現を用いて、話がつながるように筆者が再構成したものである。論旨をすり替えることのないように引用に際しては注意を払った。

①エコツアーと自然保護が両立するかどうかについて

「ガイドをやっている地域住民たちは、自然保護の意識も高いが、観光客はそれほど持っていない。人が集まるところは遅かれ早かれ自然が破壊される。しかしいろいろな制限をかけると利益を出す産業としてのシステムとして成り立たないので非常に難しい」³⁰⁾ という厳しい意見もあったが、概ね、両立しようという意見だった。両立す

ると肯定的にとらえる意見の中には、「エコツアーに参加することによって、今まで自然の大切さや自然保護への意識を持っていなかった人々が、自分の経験から自然に自然保護への意識を持つようになり、行動につながる」といった参加者の意識啓発が後の行動につながることを期待するものがあった。また、問題もあるが条件付きで両立可能という回答も多く、条件として、ルールの徹底（立ち入り制限、人数制限、持ち込み禁止、マナー等）、自然保護活動をメニューに入れる、参加者を募る層を選ぶ、地元住民の意思・参加、専門家の指導、施設の問題（負荷をかけないように）などがあげられた。

個別に記載された表現を用いながら加筆すると、観光客が増えれば生態系を攪乱する危険性が高まること、さらに、観光がマス化すれば、「どうしても保護に関心を持たない観光客が増え、動植物の生息域の破壊が起こる」と懸念されるので、「一度に多人数を入れない、地域外からの動植物を持ち込まない、などのルールを通常の観光よりも厳しくする必要がある」といった意見があげられた。また、「何らかの形で自然保護活動をメニューの中に入れる必要」があり、「人数が多くなった場合、施設の問題もクリアしなければならない。」

人数を制限するだけでなく、「ツアー中のルールの徹底や自然保護活動の専門家の指導などがあれば両立できる」や、「参加者としてある程度自然保護の知識のある人を選ぶなら両立しやすい」、「ツアーを企画する側がいかに地域の目線を持ち、現地の人々の想いを知って、企画を組み、どのような層に参加者を募るかが重要」といったように、専門家・指導者の同行や参加者層の選別を必要とするとの意見があった。逆に受け入れる地域側の課題として、「十分に地元で保護の意思、外からの影響に対し、耐えうるだけの意思が必要」、「エコツーリズムの意味をよく吟味した上で、地域の人々が参加できるような環境が大切」という意見もあった。

エコツアーの対象地として、「西表島や湿原のように人の立ち入りによる影響が大きい所でのエコツアーは自然保護という観点からは、規制を厳

しくして管理を徹底しないと両立は難しい。ただし、里山などの人の手が入った環境では、逆に過疎、高齢化が進む現代では、何らかの両立を図ることが保護の道になる」という意見に代表されるように、「両立するかどうかは、対象となるもの・地域・生息状況による」ので、「ある程度人が立ち入っても問題が少ないところ・ものと、場合によっては原則立ち入り禁止の場所など、見極めが必要」ということになる。

自然保護に資するための課題は多々考えられ、条件をクリアするためのハードルも高いかもしれないが、「エコツアーに参加して、自然保護への意識を高めることがあるだろうし、現地でお金をつかうことで、保護活動などを充実させる」ことも期待できる。保護活動の立場からみても、「産業としては厳しいが、活動資金を手当てするくらいなら可能であるし、積極的に行なうべき」であろうといった意見が寄せられた。

②エコツアーを行う際のルールおよび留意点

前問で、エコツアーにおいて、ルールを徹底することや留意すべきことがあるとの指摘が多かったが、ここではその具体的な内容について出された意見をまとめてみる。内容的には、オーバーユースを避けるためのツアーの制限、動植物等への影響の軽減、教育・学習指導、地域社会への配慮、その他があった。

まず、ツアーの制限に関しては、オーバーユースを避けるため、少人数ツアーの徹底、ツアーの回数の制限、月当たりの実施人数制限が必要で、「環境に負荷がかかりすぎないように、またツアーによるダメージが回復できる限度で行う必要がある」。例えば、「ツアーの人数を1組10人程度、1日2～3組とかにして、自然の中に入る人数を制限する」とか、「自然保護に対する意識を高めるようなツアーを実施することも重要」である。また、「デリケートな自然に対しては、エコツアー実施の是非を含めて厳密な制限が必要」である。

次に、動植物等への影響の軽減に関しては、次のような意見が寄せられた。

「動植物に被害を加えないのは大前提」として「盗掘防止対策等」を徹底する。対象となる自然のみならず、「非対象物への配慮」も大切である。

「地域外からの動植物を持ち込まない、特に置いて帰らせない。動物を対象にした場合は、一定距離以上近づかない、騒ぎすぎない。寄付や草刈りなどの自然保護活動を可能な限り取り入れる」ことも検討すべきである。

「ツアーなので参加者を楽しませることは重要だが、自然への配慮は忘れてはならない。今回のツアーでいえば、野鳥に近づかない、手を触れないなどのルールがあればよい」、「自然との付き合い方に気をつけなければならない。どこまで動物に近付いていいのか、土地にどこまで入っていいのか、植物をとってもいいのか...など」、「靴に他所の植物の種がついていたら、それを入れてしまうことになるかもしれないので、靴そうじタイムとかグッズを準備する。エコツアーに持ってくるのは意気込みだけ。とっていいのは写真だけ。残していいのは思い出と自然を守るという思いだけ」といった、参加者の心がけをコメントするものもあった。

第3に、記載項目としてはもっとも多かった教育・学習指導についてまとめる。

まず、「エコツアーを行ってよい場所かどうかを見極めるため、対象物のみならず地域全体の地理、歴史、生物等の調査・研究が必須」であり、「ガイドも含めツアー参加者の自然保護や生態系についての学習」が必要である。参加者に「ルールを守ってもらう際、ある程度学識のあるガイドがそれを周知することが重要」で、「今回のように「近づきすぎてはいけない」などの注意事項を事前に配布したり、その場で注意できるような案内人を付けたりする必要」がある。「動物を相手にした場合、こちらの行動次第では、さらに生息域を奪ってしまうなど、エコツアーが逆効果になる」恐れもあるので、「地域ぐるみで注意書きやよびかけ」をすることも求められる。

ツアーの実施にあたって、「事前に現地の自然環境や風土・文化・人間の活動についてのレクチャーを事前に行い、地域環境を理解したうえで参加することが肝要」であるし、「エコツアーという言葉自体が多くの意味で使用されているので、何らかの形でガイダンスのようなものがあるとよい。」

エコツアーは、参加者の行動を「画一的に規制するものではなく、地域や参加者の意識の違いを認め、地元の方々、参加する方々双方の満足と意識の向上をめざしたものであるべき」で「地元コミュニティや自然保護団体の話を聞いたり、参加者同士が話し合ったりする時間があつたらよい」。このような意見がある一方、「見学者の意識の変換が図れるような指導が必要」とか、「ただ観察して終わるのではなく、教育的な価値が得られるように構成されたらよい」といった、実施者側のイニシアチブを求める意見もあった。

第4に地域社会への配慮であるが、大前提として、エコツアーには、地元住民との意思疎通、コミュニケーションが取れていることは必須である。

地域住民が環境保護のために「皆で監視し、注意するルールを作っておく」ことや、「(見学・立ち入り)禁止の地域をつくることからスタート」して受け入れを増やしていくのはよい方法ではないかといった、地域側の対応への意見もあったが、多くは、エコツアーが何を地域に還元できるかを問うコメントが多かった。

地域への利益還元がなされることを、多くの参加者は主張しており、「エコツアーを行う際、エコツアーを通じて得た利益の一部を当地域の自然保護の資金にしなければいけない。そのためのシステムを構築する必要がある」といった意見や「お金や知恵(アイデア、情報)を見学地域に落としこんで帰る」、「ツアーで使うものは現地で手に入るなどツアー企画者だけでなく環境を維持している地域にも利益が出るようにする」等の意見が示された。

その他、「エコがつくと環境に優しいと思いがちだが、ツアーが自然の破壊になるのかどうか、ツアー参加者には知る義務がある。本当に自然保護に役立っているツアーには、第三者が認証を与えるなどすればよいかもしれない」という提案や、「エコツアーをするためには、駐車スペースや宿泊場所等が必要になるが、どれだけ既存のものを利用できるかが大事」といった意見も寄せられた。

③エコツアーが観光業として成り立つための課題

これについても、いくつかの異なる立場からの

意見が多数あげられた。あえてまとめると、自然保護と両立させること、地域への経済効果を生み出すこと、ツアー内容の充実・質の向上を図ること、ツアー参加者の意識改革、地域住民の主体的参加が課題とされた。

自然保護と両立させることについては、特に、「対象の保護に反することになれば本末転倒」なので、エコツアーが「本当に自然保護につながっているかが一番の課題」であると指摘された。また、「自然保護は地元の方に我慢や負担を強いることが多いので、エコツアーが何らかの貢献をするのなら嬉しいが、観光にポイントをおきすぎ、肝心の自然が破壊され、ブームが去った後には荒廃しか残らないということがないよう、持続性のある規模で行うことが大事」ともいう。そのためには、「エコツアーを企画する団体や地域住民への利益と、環境を変えない程度のツアー頻度や客数のバランス」をとるのは当然であり、一方、「エコツアーに参加することで、お金が自然保護のために使われるという認識」を広めることも肝要だとの指摘もあった。

次に、地域への経済効果を生み出すことを課題とした人も多かった。この場合、「地元の(特に経済的)メリットにつながるかどうか」がポイントで、参加者に「エコツアーに参加することで、お金がその地域におちてプラスになると認識」させるとともに、活動やプログラムの中に「地元の人を巻き込みつつ地域にお金が落ちるように」仕掛けたり、「観光客にお金を使ってもらえるような工夫」を凝らしたりする必要がある。観光客が訪れ、外部のまなごしにさらされることや、そのような人達と交流することが、地域住民にとって、自地域の価値を見直す契機になったり、気持ちの上で元気になったりする。これについては、今回、特に意見が出なかったが、まちおこしや村おこしの現場でしばしば指摘されているように、住民にとっての心理的な効果が期待でき、そのような効果を十分に引き出すことも重要である。そもそも、「地域が自立できるように促し、地域のアイデンティティ醸成や活性化につながるようしなければエコツアーは成り立たない。」

第3に、企画者(催行者)にとって、ツアー内

容の充実・質の向上を図ることは必須の課題であり、これについての指摘も多数寄せられた。

多かった指摘は、参加者のターゲットを絞って実施するのがよいという意見で、「マニア用と一般人用というように区別して運用したほうがよい。マニア用は冒険や探検というコンセプトで森の中も歩いたりする。一般人用はゆったりした感じで決まったところに行って、セットされているスコープなどをもって楽しんでもらったほうがよい」というものや、同様の指摘として「初心者、上級者のようなツアーのレベルや様々な興味に応えられるようなツアーのプランの多様化が必要」というもの、あるいは、「エコツアーはこれまでの観光よりも学習要素を多少強く出したものとして売り込むのがよく、観光客も文化団体や学校をターゲットとして絞るとよい」等のコメントがあった。それに対して、「環境に少しでも興味ある人は来やすいが、あまりにエコを強調しすぎると客足が遠ざかり、逆にエコではなくなる（啓発効果を発揮できない）」ことが懸念され、「より多くの人に認識してもらえるように、エコツアーの楽しい点や面白い点などについて、もっとアピールする必要がある」との意見もあった。

また、ツアーの良し悪しは、ガイドの質による面が大きく、「案内が悪いと良さが伝わらず、参加者の満足が得られない」といえ、「専門の対応者・解説者が必要」である。それを実現するためには、十分な事前の準備が必要で「何年もかけて（エコツアーを実施できる）環境を作り出して維持しなければならない」。質を保証するために、「業界でのエコツアー基準・認証システムの確立」が検討されてもよい。

ツアーは「体験型であること、長期滞在型にする方がよい。多様な生物や文化を見られるようにパッケージ化することや、ツアーの目玉をもつことも必要」であるし、学習活動を前面に出して、「講座受講料を旅行代金に含める」ようにしてもよい。スケジュールにゆとりを持たせるとか、トイレなどの施設整備を行うとか、参加者の快適さへの配慮が、学習的エコツアーであっても当然に必要な。参加費について、「いかに安くするか」は永遠の課題だが、「費用が高くても質が高ければ

よいという人も最近は増えている」ので付加価値を高める工夫を凝らすことも求められる。

そもそも、「経済（利益）を優先に考えてエコツアーを計画するのか、それともエコに重点をおくのか」をはっきりさせて取り組むべきであるし、「ボランティアベースでは長く続かない」のではないかとの懸念も表明された。

第4に、ツアー参加者の意識改革を課題とする意見もあった。参加者には「現地の自然に対して学ぶ姿勢を持ってほしい。現地の人との交流や物産、観光資源に対しては楽しんで」もらいたいという期待が示されたほか、エコツアーは保護活動の一環であるならば、「お金を出しているから何でも好きなことをしてよい」というのではなく、活動に制限や自然に接するルールがあることを理解してもらうことが必要との意見もあった。

第5に、地域住民の主体的な参加が課題である。「地域内部から積極的な協力が得られるように、地域住民にエコツアーや地元の自然や文化について知らせる」ことが大事であり、それを端緒として「地元住民全体による持続可能な賢明な利用や未利用資源の開発」につなげることが望ましい。地域にとってのメリットを住民が自覚することから、「エコツアーに関する意識を持つように」もっていけるとよい。また、「その土地に訓練を受けたガイドがいて、ある程度の権限を持つようになること」は特に重要である。

V 自然保護活動支援を目的としたエコツアーの可能性と課題

以上、対象者の選定などに制約はあるものの、いくつかの切り口から個人のエコツアーの評価等に関する情報を収集した。

エコツアーは本稿冒頭に示したように、環境保全と地域住民の利益の維持とを両立させる責任を負うものと考えられている。この理念に基づき、対象となる自然の保護と、当該地域への利益還元のそれぞれについて、今回得られた知見からエコツアーを評価し、その課題を述べる。

1) エコツアーの評価

①対象となる自然の保護の観点から

これには、環境教育上の効果と自然保護活動支援上の効果があると考えられる。環境教育上の効果については、今回のモニターツアーでの回答にみられるように有効性が認められる。今まであまり意識しなかった野鳥への親しみを感じるようになった（気づき）とか、ブッポウソウの生態や減少理由、人との関わり等について知ることができ有意義だった（知識）、自分もこのような活動に関わりをもちたい、下地区との情報交流のチャンネルを作りましょう（態度：動機づけ）といった意見が、限られた時間と場所のツアーでありながら、意識されたことは重要である。また、「エコツアーに参加することで、今まで自然の大切さや自然保護への意識を持っていなかった人が、自分の経験から自然保護への意識を持つようになり、後の行動につながる」との意見に示されるように、現場で体験するエコツアーの環境教育的効果は十分に期待できる。問題は、その効果をいかに引き出すかというツアーの内容や進め方である。

自然保護活動支援上の効果については、今回の調査結果からは限定的な効果を認めることができた。支持者が増えるという、保護活動をしている人や団体にとっての心理的な効果については、今回特に調べていないが存在するであろう。今回、飯田氏が全面的に筆者等の活動に協力してくれたのは、そのようなことへの期待の表れと解釈することもできる。

今回の調査で注目したのは、経済的な効果である。明らかになったことは、2つのアンケート結果が示した通り、1回のツアーでは、大きな収入は見込めないが、多少の収益は見込めるということである。今回、1人あたり負担許容額は1回あたり1000～3000円程度、20名ほどの参加者を集めたとして、総額50,000円程度という数字を、ひとつの目安として示すことができた。これは、1回あたりの数字であるが、回数を増やすことには限界がある。今回でいえば、ブッポウソウは渡り鳥なので見学できる時期が限定され、しかも繁殖期なので観察圧を高めると、巢の放棄など悪影響も懸念される。また、この時期は生態調査をするこ

とが保護活動上、優先されるので、ツアー客の案内などにあまり無駄な時間を割けないこともあろう。対象となる自然にとっても、保護活動の実践者にとっても、見学回数を増やすことには問題がある。

また、ブッポウソウ見学ツアーの場合、回答者が低額負担をイメージした場合に保護活動支援手法としてのエコツアーの評価が高く、高額負担をイメージした場合に評価がやや下がる傾向が認められた。一般論としてのエコツアーの有効性評価と費用負担限度額をクロスさせた場合には、この逆転現象はなくなったので、ブッポウソウ見学ツアーの場合の特殊事情と判断され、費用負担限度額が高くなるか低くなるかは、ツアーの内容（イメージ）に左右される部分だといえる。しかし、1人あたりの負担額を引き上げるには、対象物のインパクトが強いとか、ツアー内容がとても魅力的であるとか、条件が厳しそうである。

とはいえ、アンケートでは、活動支援の方法として、行政の補助金について高い評価がされたし、1回50,000円の収益（寄付）であれば、NPOの自立や専従スタッフの確保は全く無理だとしても、直接的な調査・保護活動の足しになることは充分あり得る。

保護活動を行う人や団体にとって、自然保護への理解を広げることは活動の大きな目的のひとつである。エコツアーには環境教育的な効果は充分期待できるので、それに加えて活動資金の足しを獲得できれば、手間をかけるだけの価値はあるといえよう。

しかし、エコツアーが評判になると問題も生じる。このことは、今回の講演会時に、他の自然保護団体関係者から諫言されたことでもある。それは、貴重な自然を対象とした場合、理解不足の見学者を招いてしまう恐れがあるということである。対象地に、管理されたエコツーリストではなく、興味本位の来訪者が増えて環境悪化を招いてしまうことや、保護団体にとって、それへの対応が新たな負担を生み出してしまうことも懸念される。実際に、盗掘や巢の放棄など、問題が数多く発生している。もっとも、これについては、だからこそ多くの人に自然保護について知ってもら

必要があるわけで、そのために現地で生の姿を見せて、解説すべきなのだという意見もあり、議論の分かれるところである。

②地域への利益還元の視点から

この場合も、心理的・社会的効果と経済的効果について分けて考えることができる。前者については、作木町下地区の場合のように、ブッポウソウの保護活動やブッポウソウという鳥の存在（毎年渡ってきて決まった巣箱で繁殖する）が、高齢化と人口減少に悩む地域における、コミュニティ活動の担い手のやる気を引き出すことにつながったり、住民の話題（「うちの鳥」という自慢）になったりする例がある。保護に取り組む地区として、マスコミに取り上げられてもいる。そのことが、他の地域活動においても刺激になり、都市住民との交流にもつながっているし、地区の住民が、自地域について学ぶ動機づけにもなっている。エコツアーに限らず、中山間地域の活性化に関連して、しばしば言及されるように、地域の自慢できるものをみつけることや、都市との交流で地域の価値に気づくこと等は大事なことであり、エコツアーはそのような機会に充分なりうる。

問題はこの場合も経済的な効果であり、保護活動支援以上に、効果は限定的である（あるいはほとんどない）のが現状であろう。今回のツアーに関しては、宿泊費、飲食費、土産代等が県北地域で消費した。とはいえ、その額は微々たるものであり、しかも、作木町下地区では公民館の使用料しか支出していない。1回20人程度のエコツアーでは、地域に還元される経済効果はほとんどない。

加えて、この場合のエコツアーの難しさは、他のツアーや交流事業以上に制約が大きいことにある。保護活動支援でも同じだが、単純に考えれば、 $[\text{参加人数} \times \text{催行回数} \times \text{客単価}]$ が多くなると経済的な意味での効果は見込めない。しかし、客単価を別にして $[\text{参加人数} \times \text{催行回数}]$ を増やせば増やすほど、対象となる自然への悪影響が増すことになり、エコツアーとしての前提が崩れることにつながりかねない。来訪者を増やす際に、環境意識の高い層にターゲットを絞った戦略を練るとか、地区内での消費金額を高めるために、長期滞在型観光への対応をしたり、地元の側がガイド

や体験メニューを提供したり、特産品を開発・販売したりするなど、付加価値を生む仕掛け・仕組みを構築する必要がある。

2) 自然保護活動支援型エコツアーの課題

上の評価や前章のディスカッションの意見などをもとに、自然保護活動支援を目的としたエコツアーの課題をまとめてみたい。

①本末転倒な事態になることを避ける

根本的には、 $[\text{参加人数} \times \text{催行回数}]$ を増やすと、対象（自然）への影響が大きくなるのが、保護活動にとっても、地域にとっても、経済的効果を生む際のネックになる。環境意識の高い層にターゲットを絞って参加者を増やすとか、ツアーの内容・プログラムを充実させて付加価値（客単価）を高めることが課題になる。地域にとっては、サービス提供を自前で行えるようにしなければならない。

経済的なことを脇においても、自然保護に資することを前提にするなら、エコツアーを実践するためには、他の場合とは異なる知識や技能が求められる。動植物や生態系（ツアーの対象物・非対象物を問わない）に関する知識を有していることが必要で、専門家やしかるべき機関との連携（ないしそれらからの指導）を密にすることが求められる。そして、次項の、ガイドや解説者の育成・確保が、保護活動を進める側にとっても、受け入れられる地域の側にとっても鍵となる。

②ガイドや解説者の育成・確保

優れたガイドや解説者の存在はエコツアーの質に直結する。適切な解説・指導は、ツアーの魅力を生むとともに、地域の自然保護・環境保全のため、特に、参加者に環境に負荷をかけない保護ルールを徹底するためにも不可欠である。ガイド・解説者として、専門家が関わることは望ましいが、専門家は往々にして自分の専門分野以外のことに無関心のこともあるので、いろいろな分野の専門家が関わるようにできた方が、解説内容の幅が広がるし、広範な環境や地域の文化等への目配りもできるようになる。しかし、適当な専門家が常にいるとは限らないし、保護活動やエコツアーに協力的であるかどうかは保証できない。その意味で

は、現地における地元の人材育成は大切である。これは、経済的な意味でも望まれる。

③ [参加人数×催行回数] 問題への対応

客単価を上げることとは別に、[参加人数×催行回数] 問題への対応について触れたい。

保護活動支援の立場からみた場合、ひとつの活動地では、先に述べたように[参加人数×催行回数]を単純に増やすことは難しい。ただし、少ない回数でも、活動資金の足しにはなるので効果は期待できる。ただし、本来の保護活動と直接関係しないエコツアーへの対応は負担も大きい。理想論をいえば、現場で保護活動を行う個人や団体から独立して、専従者を要する横断型（後方支援型）の環境NPOないし環境意識の高いリージョナルな観光業者が存在し、複数の活動現場を広範にカバーして、エコツアーを企画・催行することができれば、エコツアーの主催者となるそれらの団体や企業は、催行回数（訪問地）を増やすことや事務作業の効率化を図ることなどにより、まとまった収益をあげることができるかもしれない。

例えば、全くの仮定の話であるが、今回の調査メンバーが環境NPO等を立ち上げて、瀬戸内海から中国山地あたりまでを対象にして、各地の自然保護団体や環境団体との連携を図り、年間を通じて安定的にエコツアーを企画する（各地の活動団体への協力依頼は年に1、2度程度とし、その代わりエリア内の各方面を適当な季節にあわせて回る）ようなビジネスモデルを描けるかどうかということである。

次に、保護活動支援ではなく、地域の側での対応としては、場所をローテーションすることはできないので、当該地域において[参加人数×催行回数]を増やすことを考えなければならない。エコツアーであるという前提を堅持する限り、容易なことではないが、作木町の「めんがめ倶楽部」のブッポウソウや里山、神楽等のように、複数のメニューをもった活動を展開することで、[参加人数×催行回数]を増やすことが考えられよう。

④ ツアー内容の充実

エコツアーにおいて、[参加人数×催行回数×客単価]を増やすためには、客単価を高める（＝付加価値を高める）ことの方が、[参加人数×催行回数]

を増やすことより、ハードルが低い、あるいはエコツアーの本旨に合致する。エコツアーにはそもそも学習的な内容が含まれており、学習部分の質を高めることで、ツアーの付加価値も高まり、自然保護に資する効果も高まることが期待できるからである。

実際に、今回のアンケート等への回答にみられたように、学習的内容を強めること、保護活動への参加をプログラム化することへの参加者ニーズは高い。さらに、ディスカッションにおいて、ルール徹底の必要性が多数表明されたが、ルールを窮屈な制約ととらえるのではなく、ルールを知ることやルールを守ることそのものを、学びの内容にしていくことが考えられる。特に、地域社会との調和の取り方などについては、参加者が自分の居住地周辺や自分のフィールドにおける悩みの種である場合もあるので、現実的な問題への対応については、知りたいという欲求の対象になることも考えられる。

そのような裏話的なものでなくても、対象となる自然と地域との関わりや、地域住民の生活や文化との関わりに、多くの参加者は関心を抱く。おそらく純粋な自然好きを相手にする場合よりも客層が広がると考えられ、今回のモニターツアーでも、ブッポウソウそのものに興味がある人より、下地区住民の話の方に問題意識を喚起された人が多かったように見受けられた。エコツアーの内容を深める上で、対象地の生活・文化、住民との交流といった視点は重要である。また、自然保護をめぐるさまざまな意見を知ることなども、参加者の満足度向上に寄与する。

ただし、このような学習的な内容に関心を示し、価値を見出すのは、環境意識の高い、限定的な客層になってしまうことは避けられない。ここにエコツアーにおけるツアー対象者の選定という課題がある。傲慢な表現かもしれないが、保護活動の現場や地域の側からみて「質の高い」エコツーリスト層にターゲットを絞った事業展開を図ることも視野に入れるべきであろう。ただし、今回のディスカッションでは、問題意識の高い人にだけ理解されても、自然は守られないという意見もあった。参加層に応じたプログラムを開発し提供すること

は、エコツアーを効果的に展開するために必要である。

VI おわりに

以上のためには、自然保護団体や専門家、旅行業者、行政、地域住民、エコツーリスト等、さまざまな主体間の連携・協力・相互理解が大前提となる。しかし、現在、それが過不足なく円滑に行われている場所はあまりない。経営面が強調されると、自然体験を目玉とするエコツアーとは名ばかりの観光旅行になってしまうし、自然保護が強

調されるところでは、観光による経済効果があまり生み出されていなかったりする。時に利害が対立したり、話がかみ合わなかったりする複数の主体の間に、密な関係を築き、連携を強化することが、自然の保護と地域の活性化の両立を図るためには求められるのである。ある場所でエコツアーを創出し、展開していくためには、関係する主体の洗い出しや、それぞれの特性の理解、相互関係、それぞれの論点整理、それぞれをネットワークするための戦略、等々といった主体からの発想が大切である。

注

- 1) 近畿日本ツーリスト <http://meito.knt.co.jp/1/cb/208/>. 2008年9月24日検索。
- 2) 1990年に国際エコツーリズム協会により示されたもので、英文では、Responsible travel to natural areas that conserves the environment and sustains the well-being of local peopleである (<http://www.ecotourism.org> 2008年9月25日検索)。
- 3) 日本語訳が、日本自然保護協会(1994)にNACS-J 仮訳として掲載されている。
- 4) 広島大学総合科学研究科の教育体制は、人間科学・環境科学・文明科学の3部門と、部門横断的な時間プロジェクトとして21世紀科学プロジェクトという枠組みになっている。本調査は、このプロジェクトの一環として企画・実施されたものである。
- 5) 文部科学省による大学院教育改革支援プログラムに平成19-21年度、総合科学研究科の文理融合型リサーチマネージャー養成プログラムが採択された。本研究科のプログラムでは、大学院生による調査研究の企画・運営能力トレーニングの機会と場を設けることを狙いとしており、今回の調査は、第一義的には大学院生の実習(ただし単位にはならない)と位置づけられる。
- 6) 5月の講演会の来場者に若干名の募集としてアナウンスした。本ツアーが実習としての位置づけをもち、実習に関して、調査の企画・運営実習という側面と、その他院生の見聞を広げるための国内研修という2つの側面があり(院生の中に関わりの程度を異にする2タイプの参加形態がある)、後者の参加枠を確保するために、純粋に一般の参加は若干名しか受け入れることができなかった。
- 7) 参加者が20名で回答数が20ということは、調査スタッフもアンケートに答えているということである。今回の場合、調査者といっても実習として加わっており、著者の全員がブッポウソウの見学や現地を訪れるのは、ツアー時が初めてであった。また、事前に調査の落としどころを検討したり、どんなデータがとれるかといった話をしたりしていない。そのためデータをとり対象として、調査者を含めても問題ないと判断した。
- 8) ディスカッションの司会進行やとりまとめを行った浅野は回答していない。この場合は、項目の選択や数字を尋ねたアンケート(上記の注7)と違い、意見をデータとして集めているので、考察する人間が自分の意見をデータとして扱うのはよくないと判断した。
- 9) 飯田知彦によるブッポウソウに関するホームページ <http://www3.ocn.ne.jp/~kumataka/bupposoconservationmanual.html>による(2008年9月25日検索)。
- 10) この経緯は戸川幸夫の小説「仏法僧」に紹介されるなど、野鳥愛好家等の間ではよく知られている。現在、ブッポウソウとコノハズクを両方セットにした観察会(しかも比較的容易に観察できる)を企画できるのは広島県位という状況にある。
- 11) 前掲注9。
- 12) 前掲注9。
- 13) 旧作木村(現三次市作木町)の下地区で、2004年

- から活動を始めた住民グループ(現メンバーは6名)、地域の自然について学びながら、それを活かして活動することを目的としている。飯田氏のブッポウソウ保護活動を知り、活動に協力し、ともに巣箱掛け等を行うようになった。この他に里山保全活動や都市住民との交流等も手がけている。「めんがめ」の名称は地域のシンボリックな山である「女亀山」に由来する。
- 14) 2008年6月29日の「めんがめ倶楽部」メンバー等からのヒアリングによる。
- 15) 前掲注14。
- 16) 無回答3.7%があるので100%にならない。以下の割合表記では同様に無回答分を含めた数字を示す。
- 17) 学生には10代や中高年者もいるので20代の30%より多い。
- 18) 1位を6点、2位5点と点数を与え、各項目について得点の平均点を求めた。
- 19) 必要な費用が決まっているとすれば負担額を下げるのならば、参加者数を増やさなければ必要額を確保できない。
- 20) この設問に関しては学生と学生以外とで回答に有意な差が確認された。学生が無条件でぜひ参加したいと答えたのに対し、学生以外では内容次第という回答が多くなった。
- 21) 偏りというのは、会場に集まっていた人が野鳥や自然保護に関心の高い人が多かったという意味での偏りであり、回答者の構成上留意が必要と考える学

生か学生以外かという違いはツアーのイメージに対してほとんど差が認められなかった。

- 22) 前述の世界観光機構・国連環境計画(1994)などに示されている。
- 23) 学生であるかないかでデータをみると負担許容額にあまり差が認められないが、年齢層別にみると、10代と20代とでは差がある。20代より10代の許容額が低い。
- 24) 日本生態系協会(2001:100)による。
- 25) 当初21名参加予定だったので21名で計算した結果をアンケートに記載した。ここでもそれと同じものを掲載する。回答者にはこの数字で考えてもらった。
- 26) 実際には、今回、筆者等が無償で行ったツアーの企画・事務作業・資料作成に充てられる経費も本来であれば保護活動団体ないしその支援団体が負担すべき経費になるので、謝金分を全額、保護活動の事業費に投入することはできない。
- 27) 15,000円～20,000円のように幅を持った回答については、中央の値17,500円と回答があったものとみなした。
- 28) 本人からの話では年間20万円以上掛かっている(自己負担)とのことである。
- 29) 例えば、北海道での現地集合、現地解散のエコツアーがあった場合、広島-北海道間の旅費は除くという意味である。
- 30) 本節の以下の記述で括弧内の表現はディスカッション・シートからの転記である。

文献

- 飯田知彦(2008): 広島県におけるブッポウソウの個体群保全の成功例。日本生態学会全国大会ESJ55講演要旨一般講演(口頭発表) A2-10。
- 飯田知彦(1992): 電柱を営巣場所にするブッポウソウ *Eurystomus orientalis* の繁殖分布。Strix, 11, pp.99-108。
- 飯田知彦(2001): 人口構造物への巣箱架設によるブッポウソウの保護増殖策。日本鳥学会誌, 50, pp.43-45。
- 世界観光機構・国連環境会議発表, 日本自然保護協会訳(1994): 国立公園と保護地域における観光推進ガイドライン。日本自然保護

協会『NACS-Jエコツアーリズム・ガイドライン』, pp.27-86。(WTO・UNEP, 1992, Guidelines: Development of National Park and Protected Areas)。

- 日本自然保護協会(1994)『NACS-Jエコツアーリズム・ガイドライン』日本自然保護協会。
- 日本生態系協会(2001):『環境教育がわかる事典』柏書房。
- ビートン, S. 著, 小林英俊訳(2002)『エコツアーリズム教本』平凡社。
- フンク, C., 浅野敏久(2002): エコツアーリズムの概念と課題。地理, 47(3), pp.22-27。

調査票1 講演会来場者を対象とした調査用紙

自然保護活動支援につながるエコツアーに関するアンケート

本日は講演会にご来場いただきありがとうございます。

今回の講演会は、広島大学総合博物館の公開講演会であると同時に、総合科学研究科の研究プロジェクトの一環としての企画でもあります。今回担当する総合科学研究科のプロジェクトチームでは、ブッポウソウ・プロジェクトを事例として、自然保護活動の支援策としてのエコツアーに関する情報を集めており、本日も会場のみならずアンケート調査への協力をお願いしたいと考えています。

急なお願いでございますが、なにとぞ、ご協力をよろしくお願ひします。

総合科学研究科 21世紀科学プロジェクト担当 浅野敏久
739-8521 東広島市鏡山1-7-1
082-424-6364
toasano@hiroshima-u.ac.jp

I. ブッポウソウや野鳥への関心についておたずねします。

Q1 あなたは野鳥についてどの程度関心がありますか。

1. とてもある
2. まあまあある
3. ふつう
4. あまりない
5. まったくない

Q2 あなたはブッポウソウという鳥をどの程度ご存知でしたか。

1. よく知っていた
2. 名前くらいは知っていた
3. 知らなかった

Q3 今回の話を聞いて、ブッポウソウや野鳥について関心が増えましたか。

1. とても関心が高まった
2. やや関心が高くなった
3. 変わらない
4. やや関心がなくなった
5. 大きく関心がなくなった

1

Ⅲ. 次にブッポウソウの話をはなれて、一般的なエコツアーについて質問します。

※エコツアーという言葉は近年、幅広い意味で使われています。ワイルドな自然を娯楽として体験するようなものから、野生動物の保護活動現場を訪ねて活動に参加するようなものまで含まれます。

例：山歩き、急流下り、原生林を見る、植林ツアー、希少動植物保護ツアーなど

Q7 あなたがイメージするエコツアーはどのようなものですか。枝問ごとにあなたの考えに近いものを1つ選んで○をつけてください。

Q7-1. ツアーの行き先

1. 海外
2. どちらかといえば海外
3. どちらかといえば国内
4. 国内
5. どちらともいえない

Q7-2. ツアーの内容

1. 壮大な自然の景観を見物する
2. 豊かな自然の中で山歩きや急流下りなどを楽しむ
3. 身近な自然の中で採集したり、工作したりといった活動ができる
4. 生物の不思議や自然保護などについて学ぶことができる
5. 訪問した先の地域住民やNPOなどと交流することができる
6. その他〔 〕

Q8 自然保護活動に参加するとか、自然保護地区の住民やNPOへの経済的メリットを生み出すとか、自然保護につなげることを目的としたエコツアーをあなたはどの程度評価しますか。1つ選んで○をつけてください。

1. とてもよい方法である
2. まあまあよい方法である
3. どちらともいえない
4. あまりよい方法とはいえない
5. よくない方法である

Q9 あなたが体験するエコツアーにおいて費用に、訪問先の自然保護活動に使うための費用が上乗せされるとしたら、いくらくらいまでなら認められますか。

Q9-1. 国内ツアーの場合

1. 0円
2. 0～500円
3. 500～1000円
4. 1000～3000円
5. 3000～5000円
6. 5000～10000円
7. 10000円以上 (円くらい)

Q9-2. 海外ツアーの場合

1. 0円
2. 0～1000円
3. 1000～3000円
4. 3000～5000円
5. 5000～10000円
6. 10000～30000円
7. 30000円以上 (円くらい)

3

II. ブッポウソウの保護活動についておたずねします。ここでの質問は、もしするとしたらという仮定の話です。そのことをふまえて回答ください。

Q4 紹介いただいたブッポウソウの保護活動を資金的に支援するとしたら、どのような方法が望ましいと思いますか。あなたが望ましいと思う順に、順位をつけてください。よくわからない項目は、空欄のまま結構です。

方法	順位
1. 行政の助成金・補助金（行政が積極的に保護事業を行う）	位
2. 財団などの助成金	位
3. 保護団体などをつくって会員から会費を集める	位
4. 保護基金をつくって寄付を募る	位
5. エコツアーなどの事業を行い、収益を保護活動に充てる	位
6. 実際の活動に関わる人の手弁当で行う	位

Q5 ブッポウソウの保護活動の一環としてのエコツアー（保護活動の現地を見学するとともに、活動やそのほか、関連する自然についての解説を受けることができ、場合によっては活動の一部を体験することができるようなメニューのパッケージツアー）を行い、参加費の一部を活動資金に充てることにしたいと思います。この方法をどう評価しますか。あなたの考えにもっとも近いものを1つ選んで○をつけてください。

1. とてもよい方法である
2. まあまあよい方法である
3. どちらともいえない
4. あまりよい方法とはいえない
5. よくない方法である

Q6 「ブッポウソウ見学ツアー」があったとして、あなたは参加してみたいと思いますか。あてはまるものを1つ選んで○を1つつけてください。

1. ぜひ参加したい
2. 内容によっては参加したい
- ア. 保護活動が前面に出たものでなく、自然観察・自然体験的なものなら参加したい
- イ. 保護活動について学べるものや保護につながるものであれば参加したい
- ウ. その他〔 〕
3. 参加したいと思わない
4. まったく関心がない

2

IV. あなたご自身についておたずねします。当てはまるものに○をつけて下さい。

Q10 性別 1. 男 2. 女

Q11 年代 1. 20歳未満 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代
6. 60代 7. 70歳以上

Q12 職業 1. 会社員・公務員等の勤め人 2. 自営業・事業主・農漁業 3. 学生
4. パート・アルバイト等 5. 主婦/主夫 6. 無職 7. その他〔 〕

Q13 あなたが普段、関心を持っている趣味を全てお選びください。（○はいくつでも可）

1. ジョギング・ウォーキング
2. 山歩き・ハイキング
3. 球技（野球、サッカー、バレーボールなど）
4. 釣り
5. その他スポーツ
6. 鳥の飼育
7. その他ペットの飼育
8. バードウォッチング
9. その他自然観察
10. 写真撮影
11. スポーツ観戦
12. 映画鑑賞
13. 家庭菜園・園芸
14. 国内旅行
15. 海外旅行
16. 博物館・美術館めぐり
17. 動物園めぐり
18. クラフト・日曜大工
19. 手芸
20. 料理
21. キャンプ
22. 読書
23. ドライブ
24. 楽器の演奏
25. カラオケ
26. 散歩
27. 演劇・コンサート
28. その他〔 〕

Q14 あなたが関心を持っている環境問題に○をつけてください。（○はいくつでも可）

1. 温暖化
2. 砂漠化
3. 熱帯林の減少
4. 海洋汚染
5. 野生動物の減少
6. オゾン層の破壊
7. 途上国の公害問題
8. 酸性雨
9. ゴミ問題・リサイクル
10. 日本国内の公害問題
11. 里山・ため池等の環境悪化
12. 河川などの水質汚濁
13. 外来種の侵入
14. その他〔 〕

Q15 あなたは本日の講演会に限らず、普段、講演会や行事・イベントの情報をどこから入手しますか。主なものを全て選んで○をつけてください。（○はいくつでも可）

1. テレビ
2. ラジオ
3. 新聞
4. 雑誌
5. タウン誌（リビングやプレスネットなど）
6. 機関紙・学会誌
7. 携帯電話（通話以外のコンテンツ、インターネット等）
8. インターネット・コミュニティ（ブログ、メーリングリスト等）
9. その他インターネット
10. ポスター・パンフレット
11. ダイレクトメール
12. 知人・友人・家族の話（クチコミ）
13. 自治会の回覧板や学校からの配布物
14. 行政の広報誌
15. 講義時の教員の紹介
16. その他〔 〕

アンケートへのご協力、どうもありがとうございました。

尚、6/28～6/29にブッポウソウ・エコツアーを行います。興味をお持ちの方は係の者よりチラシをお受け取り下さい。

4

調査票2 エコツアー参加者を対象とした調査用紙

Q1からQ10まであります。
ご協力よろしくお願いいたします。

Q1. 以下の各項目の評価について、当てはまるもの1つに○をつけてください。

	1.とても満足	2.満足	3.どちらともいえない	4.不満	5.とても不満
① 県民の森 ・ 自然環境・雰囲気 ・ 解説	1.	2.	3.	4.	5.
② 楽箱ポイント ・ 実際にブッポウソウを見られたこと ・ 野鳥の観察・記録の体験 ・ 解説	1.	2.	3.	4.	5.
③ 夜の観察会（声のブッポウソウ）	1.	2.	3.	4.	5.
④ 各コテージでの1日目のまとめ	1.	2.	3.	4.	5.
⑤ 地元の方の話	1.	2.	3.	4.	5.
⑥ 常清の滝 ・ 自然環境・雰囲気 ・ 解説	1.	2.	3.	4.	5.
⑦ 2日目の昼食後の議論	1.	2.	3.	4.	5.

Q2. 今回のツアーの移動についてお伺いします。

① 歩く量はどうか？

1. とても多かった
2. 多かった
3. ちょうどよかった
4. 少なかった
5. とても少なかった

Q7. ①～③の各項目について、今回のエコツアーに参加してみて、考えが変わりましたか？

考えが変わった場合、どのように変わったかお答えください。

① 野鳥に対する考え

② 自然保護活動についての考え

③ エコツアーで訪れる地域についての考え

Q8. 今回のエコツアーの費用を表にまとめました。

この表を参考にさせていただいた上で、以下の①～④の問いにお答えください。

	全体 (21人)	1人当たり
バス代	137,000円	約6,500円
宿泊費	54,500円	約2,600円
食事代	3,850×21円	3,850円
温泉代	300×21円	300円
外部講師謝金	?円	?円
総額	278,650円+?円	約13,250円+?円

① もし今回のような内容のエコツアーを独立採算の事業として行なうとしたら、1人当たりの参加費はいくらぐらいに設定するのが妥当だと思いますか？

_____円

② 今回のようなエコツアーの参加人数は何人ぐらいが妥当だと思いますか？

ツアーの内容、サービスの質、費用、自然への圧力などを勘案してお答えください。

_____人

② バスでの移動はどうか？

1. とても快適だった
2. 快適だった
3. どちらともいえない
4. 疲れた
5. とても疲れた

Q3. 今回のツアーの参加人数はどうか？

1. とても多かった
2. 多かった
3. ちょうどよかった
4. 少なかった
5. とても少なかった

Q4. 今回のツアーの宿泊場所はどうか？

1. とても満足した
2. 満足した
3. どちらともいえない
4. 不満だった
5. とても不満だった

Q5. 今回のツアーの滞在時間はどのくらいが妥当だと思いますか？

1. 日帰り
2. 一泊二日でちょうどよかった
3. 二泊三日
4. 三泊四日以上 (泊 日)

Q6. 今回のエコツアーは、あなたが想像していたものとあっていたか？

違っていた場合、どのように違っていたか簡単にお書きください。

1. あっていた
2. 違っていた

③ 質問①、②で設定された参加費と人数で今回のエコツアーが実施される場合、参加されますか？どちらかの数字に○をしてください。

1. 参加する
2. 参加しない

④ 今回のエコツアーに限らず、一般に自然(保護)学習的なエコツアーがあった場合、参加費がいくらぐらいであれば、参加されますか？

※ なお、現地のツアー出発地、到着地までの旅費は別とします。これは、例えば、北海道で現地集合、解散のエコツアーがあった場合、広島-北海道間の旅費を除き、現地で案内を受けるエコツアー部分のみの参加費(現地での交通費を含む)がいくらぐらいまでなら参加されるかという意味です。

_____円

Q9. 今後、どのようなエコツアーに参加してみたいと思いますか？

簡単にお書きください。

Q10. 最後に今回のエコツアーに関するご意見をご自由にお書きください。

アンケートは以上です。

お疲れのところご協力いただき、本当にありがとうございました。